不登校児童生徒一人一人の状況に応じた対応ができる教職員集団を目指して

－　子供の気持ちに寄り添うための、テキスト「安心安全ナビ」の作成と校内研修の実践を通して　－

子ども教育相談係
期研修員　　髙田　実知宏

《研究の概要》

本研究は、教職員がチームとなって、不登校児童生徒一人一人の状況に応じた対応を行えるよう、児童生徒理解を深め共通理解を図るための体制づくりを目指した。まず、児童生徒の心理面に着目したテキスト「安心安全ナビ」を作成し、不登校の状態の理解とアセスメントの仕方を理論的に学べるようにした。次に、「安心安全ナビ」を活用した演習型の校内研修プログラムを作成し、様々な演習を通してアセスメントについての理解を深め、チーム支援を実践形式で演習できるようにした。その結果、テキスト「安心安全ナビ」を活用した学びと校内研修プログラムの実践の往還を通して、教職員において多面的な児童生徒理解が深まるとともに、組織的な支援に対する意識の向上が見られた。また、共通の知識や考え方をもつことがチーム支援を行う上で重要であることを、研究を通して明らかにした。

キーワード　【教育相談　児童生徒理解　安心安全　チーム支援　校内研修】

群馬県総合教育センター
分類記号：Ｆ０９－０１　令和７年度　２８８集

Ⅰ　研究背景

文部科学省の「令和６年度児童生徒の問題行動・不登校等生徒指導上の諸課題に関する調査結果」によると、小・中学校における不登校児童生徒数は35.3万人を超え、12年連続で増加し過去最多となっている。同調査結果では、増加の要因として複数の背景が挙げられている。まず、児童生徒の休養の必要性を明示した「義務教育の段階における普通教育に相当する教育の機会の確保等に関する法律」の趣旨の浸透や、コロナ禍以降の保護者や児童生徒の登校に対する意識の変化である。加えて、特別な配慮を必要とする児童生徒に対する早期からの適切な指導・必要な支援や、生活リズムの不調などを抱える児童生徒に対する指導・支援に係る指導上の課題なども指摘されている。一方、増加率は、小学校5.6％、中学校0.1％、小・中学校全体で2.2％であり、いずれも前年度と比較して低下し、特に中学校の増加率は小さかった。同調査結果では、増加率の低下には多角的な支援が寄与している。組織面では、チーム学校による丁寧なアセスメントやスクールカウンセラーやスクールソーシャルワーカーなどの専門的な知見を有する人材の活用、一人一台端末を活用した心の健康観察による早期把握が挙げられる。環境面では、個々の児童生徒に応じた学習支援の充実や校内外の教育支援センターの設置をはじめとした多様な学びの場、保護者への相談支援や情報提供の充実などが、背景として指摘されている。

本県でも、小・中・高いずれの学校種においても不登校児童生徒は増加傾向にあり、令和６年の「第４期群馬県教育振興基本計画」によると、「学校生活等における悩みを抱える子供の支援や、不登校となっている子供が社会と関わりをもつことができる機会の保障等」が求められている。また、具体的な施策として多岐にわたる不登校の原因・背景を踏まえ、「スクールカウンセラー等による適切なアセスメントを行い、関係機関とも連携・協働しながら個々の生徒に応じた具体的な支援」が行われている。

これらのことから、不登校児童生徒の増加に伴い、チーム学校による丁寧なアセスメントと個々の生徒に応じた具体的な支援の重要性が求められていることが分かる。一方で、多忙な教育現場では、その場その場で求められる対応について、経験則に頼った経験が多くみられる。また一人の教職員が何とかしようと頑張りすぎた結果、個人で抱えてしまい、疲弊している現状もある。このようなことから、全教職員が児童生徒理解と支援の方向性について共通の視点をもち、組織的に支援を展開するための具体的なツールと研修の在り方を構築することが必要であると考える。

そこで、本研究では教職員が不登校児童生徒に対するチーム支援を行う上での共通基盤を作ることができるように、児童生徒の心理面に着目した「安心安全ナビ」をツールとして作成する。また、教職員個人が日常における不登校児童生徒との関わりの場面を設定し、子供たち一人一人への理解を深められるようにする。さらに、教職員が組織として物事に協働して対応する意識を高めることを目指し、「安心安全ナビ」を活用しながら、チームによるアセスメントの仕方や具体的な対応方法を学ぶ演習型の「校内研修プログラム」を計画する。「校内研修プログラム」は、多忙な現場でも実施しやすいよう、年度初めに１回、組織全体の共通理解を図るために実施することを想定している。校内研修後に復習を行い、児童生徒理解をより深められるよう、「安心安全ナビ」に「校内研修プログラム」と同じ流れでアセスメントの演習を行えるワーク集を加えた。こうした取組が、教職員個人の不登校児童生徒への理解を深めるとともに、チーム学校として協働しながら児童生徒を支援していこうとする意識の高まりにつながると考え、本主題を設定した。

Ⅱ　研究のねらい

小・中学校教職員に向けて、テキスト「安心安全ナビ」を作成するとともに、テキストを活用した校内研修を実施することが、教職員一人一人のより確かな児童生徒理解と、チーム支援を行う上での共通理解を十分なものにすることに有効であったか明らかにする。

Ⅲ　研究内容

1　基本的な考え方

(1)　不登校児童生徒一人一人の状況に応じた対応とは

教育相談は、「生徒指導提要」（令和４年12月）において生徒指導の一環として位置付けられており、重要な役割を担うものである。このことを踏まえ、生徒指導と教育相談を一体化させて、全教職員が一致して取組を進める必要性が示されている。そのために、教職員には次の三つの視点が求められている。

「① 指導や援助の在り方を教職員の価値観や信念から考えるのではなく、児童生徒理解（アセスメント）に基づいて考えること。」

「②児童生徒の状態が変われば指導・援助方法も変わることから、あらゆる場面に通用する指導や援助の方法は存在しないことを理解し、柔軟な働きかけを目指すこと。」

「③どの段階でどのような指導・援助が必要かという時間的視点を持つこと。」

不登校の状態や要因は多様であり、画一的な対応では解決が困難な場合が多い。本研究においては、「不登校児童生徒一人一人の状況に応じた対応」について、「生徒指導提要」が提唱する教育相談の姿勢を基盤とし、指導や支援を教職員個人の価値観や信念、経験則から判断するのではなく、チームによる多角的なアセスメントに基づいて支援目標や具体的な支援を考えることと捉える。また、児童生徒の変容に合わせて指導・支援を更新する柔軟な働きかけと、どの段階でどのような支援が必要かを見極める時間的視点をもち、組織として一貫性のある支援を継続していくこととする。

(2)　教職員集団とは

学校における諸課題への対応について、「生徒指導提要」では、「教職員一人一人が児童生徒に対する共通理解の姿勢を持ち、学校全体でチームとしての指導・援助を行う体制の充実を図ることが肝要」であると示されている。不登校対応においても、組織として対応する体制の構築が不可欠である。

本研究においては、「教職員集団」について、教職員個人の頑張りや経験則に頼った属人的な対応から脱却し、単なる情報の共有に留まらず、チームで行ったアセスメントを基に役割分担を明確にしながら、担任が不在の際でも一貫した支援を継続できる教職員の集団と捉える。

(3)　子供の気持ちに寄り添うとは

不登校児童生徒への理解と支援について、「生徒指導提要」では、「どのような学校であれば行けるのかという支援ニーズや、本人としてはどうありたいのかという主体的意思（希望や願い）、本人が持っている強み（リソース）や興味・関心も含め、不登校児童生徒の気持ちを理解し、思いに寄り添いつつ、アセスメントに基づく個に応じた具体的な支援を行うこと」の重要性が示されている。

本研究においては、「子供の気持ちに寄り添う」ことについて、単に共感を示すだけでなく、特定の要因を性急に断定せず、児童生徒の置かれた状況や現在の心理状態について多角的にアセスメントを行い、支援しようとする姿勢そのものと捉える。

(4)　安心安全とは

不登校児童生徒の回復過程において、心のエネルギーの充填は不可欠である。佐賀県教育センター（昭和60年， 平成17年）が提唱した「心のエネルギー曲線」によると、エネルギーが低下している時期には、何よりも適切な休養が優先される。また、ポリヴェーガル理論（多重迷走神経理論）に基づけば、人間が他者と交流し、学習や成長に向かうためには、自律神経系が「安全である」と感知していることが前提条件とされている 。

本研究における「安心安全」とは、児童生徒が身体的・心理的な脅威を感じることなく、自分のペースで休んだり動いたりすることが許容されているという心理的安全性が保障されている状態と捉える。

2　研究構想図

本研究では、テキスト「安心安全ナビ」と演習型の校内研修プログラムが往還するよう構想した。

3　教材の概要

(1)　テキスト「安心安全ナビ」について

①　テキスト「安心安全ナビ」作成のねらい

群馬県教育委員会「不登校児童生徒の自立へ向けて」（平成30年）では、不登校児童生徒への支援の項目で、欠席が長期化している児童生徒に対しての支援は、適切なアセスメント（見立て）の下で見通しをもって働きかけ、学校との関わりを維持できるよう、学校としての組織的な支援体制を整え、教職員が連携して支援することの重要性が示されている。また、不登校の要因は、複合的な理由によるものが多いため、一人の教師ができる支援には限界があること、本人の心理的な状態を見極めながら、組織で支援していくことが重要であることが述べられている。しかし、学校現場においては、不登校児童生徒への対応が教職員の経験や感覚に委ねられやすく、組織的なアセスメントが十分に機能しにくいという課題がある。また、担任が責任感から事態を抱え込み、孤立してしまうことも大きな課題である。

群馬県生活こども部が実施した「不登校の体験に関する親のアンケート調査結果」（令和７年）で４割以上の保護者が「学校の対応に不満を感じていた」と回答している。その要因の一つとして、本人の心理的な状態や思いを捉えきれないまま、教職員個人の主観による働きかけを行った

ことが、本人や保護者のニーズとのズレを生んでいるためと考えられる。

そこで本研究では、全教職員が児童生徒の心理状態に関する共通の基礎知識をもち、多角的な視点で分析するアセスメント手法を習得するため、テキスト「安心安全ナビ」を作成した。本テキストを通して教職員一人一人が「個人の学び」を深め、主観や経験則に頼らない的確なアセスメント能力を身に付けることは、個々の児童生徒のニーズに合致した支援を行う前提条件となる。

このように、本人や保護者のニーズと合致した組織的な支援へとつなげていくための共通基盤を作ることをねらいとしている。

② テキスト「安心安全ナビ」の内容と構成

「安心安全ナビ」は、小・中学校において、教職員がチームとして不登校児童生徒の対応について考える共通基盤を作るため、児童生徒の心理面について学び、アセスメントの仕方やコミュニケーションの方法を身に付けられるテキストである。

テキストの作成に当たって、群馬県こころの健康センター「ひきこもり家族教室」（令和５年、第３版）を参考にした。「ひきこもり家族教室」は、ひきこもり状態にある当事者や家族への支援を目的としたプログラムである。家族が当事者の状態を正しく理解し、適切な関わり方を学ぶことで、家族全体の安心・安全を確保し、本人の社会復帰への意欲を高めることを目指している。

テキスト「ひきこもり家族教室」は当事者の心のエネルギーに着目し、回復には「安心・安全な環境」と「理解してくれる人の存在」が不可欠であるとの視点に立っている。また、当事者本人を変えようとするのではなく、「ひきこもり家族教室」での学びから家族が当事者との関わり方を変化させて、家族が「理解してくれる人」となり、当事者にとって「安心安全な環境」を作ることで、エネルギーの充電を促す環境を作ることを重視している。さらに、当事者の状態を心のエネルギーを曲線（図１）として可視化することで、先行き不透明な対応に一定の見通しをもつことができ、支援を行う家族自身の不安感を軽減する構成となっている。

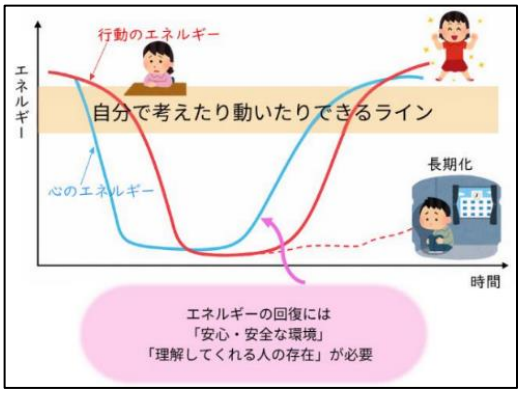


図１　心のエネルギー曲線

本研究では、この「周囲の安心が、当事者の安定と変容を促す」という視点や、当事者の状態を段階的に捉える支援の枠組みが、不登校児童生徒及びその保護者への支援においても極めて有効であると考えた。そこで、この枠組みを学校現場に即して再構築し、教職員が共通の視点をもって支援に当たるための指針として、本テキストを作成した。

内容は表１のように構成した。

表１　「安心安全ナビ」の内容

章	項目	概要（ねらい・内容）	ページ
第Ⅰ章	１．不登校とは	・文部科学省の不登校の定義の再確認	1
	２．不登校の要因	・ＢＰＳモデルをもとに、不登校は生物学的・心理学的・社会的な背景が複雑に絡み合っていることを理解し、行動の背景にある要因や本人の気持ちを考えるアセスメントの大切さを知る	1
	３．回復までの道のり	・心のエネルギー曲線をもとに、不登校の状態の推移を心のエネルギーを軸に捉え、回復には「安心安全な環境」と「理解してくれる人の存在」が必要であることを知る	2
	４．不登校支援の目標	・「社会的自立」をゴールとし、一人一人の状況に応じた長期的・多角的な視点をもつ必要性の再確認	3

第Ⅱ章	１．心のエネルギー曲線と支援	・心のエネルギー曲線を用いて児童生徒の心理的エネルギーの状態を可視化し、各段階に応じた具体的な支援の在り方を知る	5
	２．本人と家族の関係性	・本人や家族の葛藤や、本人・保護者・学校の三者の関係性の重要性について知る	6
	３．保護者への働きかけ	・家族支援の視点を取り入れた、学校・家庭が一体となった安心安全な環境づくりの必要性 ・総合教育センターで行っている保護者支援の紹介	7
	４．カウンセリング手法	・テキスト「安心安全ナビ」で取り入れている、日常的に使えるカウンセリング手法の紹介	9
第Ⅲ章	１．本人の気持ち	・不登校児童生徒の「学校を休んでいるときの気持ち」や本人の抱えている不安について知る	10
	２．歩き出しに向けて	・「安心・安全な環境」でどのように心のエネルギーを高めていくのかについて知る	10
	３．コミュニケーションについて	・安心感を与えるコミュニケーションの取り方について学ぶ	12
	４．家庭との信頼関係づくり	・家庭との信頼関係づくりについて、特に家庭訪問の場面を例に学ぶ	16
第Ⅳ章	小さなＳＯＳの例	・特に若手教員に向け、早期発見のため、児童生徒が発するＳＯＳに気付けるよう、「学習面」など観点別に例示	18
	欠席連絡対応モデル	・特に若手教員に向け、欠席連絡時のチェックポイントや組織対応のポイントについて例示	19
	アセスメントワーク	・校内研修での演習と密接に連動 ・アセスメント演習を行うための、五つの事例 ・事例についてのアセスメント例	20

(2)　「校内研修プログラム」について

①　「校内研修プログラム」の内容

「不登校」というテーマで校内研修を行うことは必要であるが、いつ、どのように行うことがよいか学校現場で悩むことがある。そこで、本研究では、年度初めに１回の研修を行うことが効果的であると考えた。研修は60分間で取り組むことができる内容とし、60分間の中で共通理解を図るとともに、グループワークを取り入れた演習を行うことで、若手教員と中堅教員の相互成長や教職員一人一人の多様な気付きを促すものとしていく。

校内研修前半は、講義・演習型で行う。はじめに事例を示し、アセスメントの流れに沿って、テキスト「安心安全ナビ」の第Ⅰ章から第Ⅱ章１までの内容を基に不登校の要因や不登校児童生徒の心理面の理解などを学ぶ。その際、氷山モデル（次ページ図２）を用いて、水面上にある言動だけでなく、水面下にある「背景要因」に目を向けるようにする。この氷山モデルは、まず上段で児童生徒の言動をＢＰＳモデルに基づき、「生物学的要因（発達特性、病気など）」、「心理学的要因（認知、感情、信念、ストレス、パーソナリティなど）」及び「社会的要因（家庭や学校の環境や人間関係など）」に注目して分析する。さらに、下段でそうせざるを得なかった気持ちを想像し、児童生徒の外面から内面へと理解を深めていく。続いて、心のエネルギー曲線と段階別支援の例を基に、支援目標と具体的な支援を考える活動を行う。

図２　児童生徒の心理面を考える氷山モデル

校内研修後半では、チームで別の事例をもとにアセスメントをし、支援目標と具体的な支援を考える演習を行い、定着を図る。

また、学校現場でもすぐ研修が行えるよう、口述が入り、問いかけ例や解答例を加え、クリックのタイミングを示した資料を用意した（図３）。

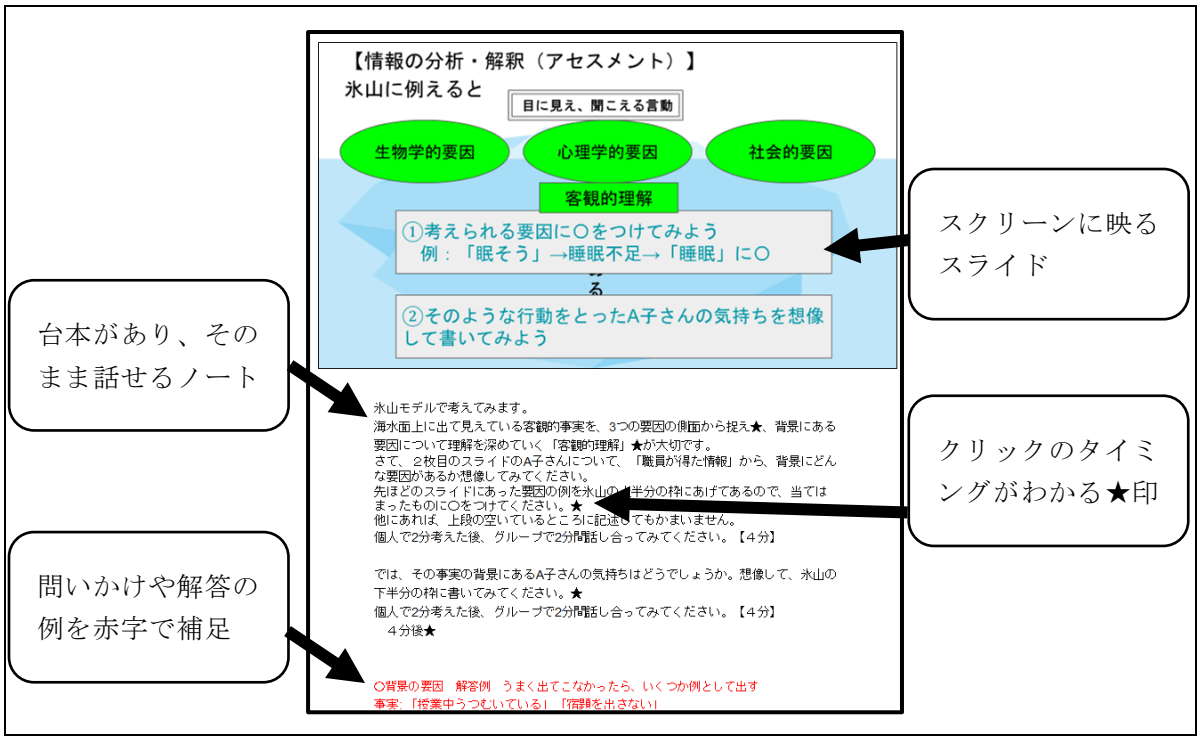


図３　校内研修の資料

②　テキスト「安心安全ナビ」と「校内研修プログラム」の関連

本研究では、テキストを「個人の学び」、校内研修を「組織の学び」と位置付け、連動を図った。まず、テキスト「安心安全ナビ」を通して、不登校という状態を理解するとともに、アセスメントの手法を身に付ける。次に、テキストで学んだ知識を共通基盤として、「校内研修プログラム」でのグループ演習を展開する。個人の学びを組織でのアセスメント実践につなげることで、チームによるアセスメントの有効性を実感し、実践へつなげる意欲を高めることを目指した。この連動により、日常的な生徒指導においても組織的に相談・対応できる体制の構築を図り、教職員の抱え込みや孤立を防ぐ。また、校内研修後にテキストの内容を振り返ることで、個人の学びをより深めることができる。

Ⅳ　研究方法

１　校内研修実践の概要

本実践では、「校内研修プログラム」の有効性の検証をするため、計４回の実践を実施した。各回で得られた教職員からのアンケートや反応から見取った課題を次回のプログラム構成に順次反映させることで、より現場のニーズに即した演習型の校内研修へと改善を図った。

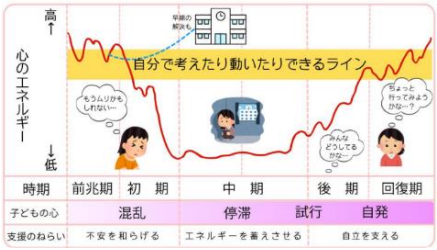
実施時期	実施場所	対象・人数	概要・改善のポイント
令和７年 ９月16日（火）	総合教育センター	係指導主事・研究員 長期研修員 （14名）	【校内研修の試行】 ・演習事例の検討 ・時間配分の検証 ・ワークシートの作成 ・氷山モデルの改善 ・心のエネルギー曲線を用いた時間的視点の導入
令和７年 ９月22日（月）	研究協力校	所属校職員（19名）	【作成者による中学校での実践】 【検証アンケート①】 ・ワークシートの記入項目の整理 ・時間短縮のため、口述の削減 ・スライドの修正（画像） ・テキスト内の演習事例を増やし、アセスメント例を追加
令和７年 10月27日（月）	研究協力校	所属校職員（16名）	【他教員による小学校での実践】 【検証アンケート②】 ・口述の整理 ・後半グループワークの事例検討 ・スライドの修正（質問の明示）
令和７年 11月14日（金）	総合教育センター	係指導主事・研究員 （14名）	【校内研修完成】

２　検証計画

検証の視点	方法
本研究の実践を通じ、現場のニーズを反映させて、テキスト「安心安全ナビ」及び校内研修の構成を改善できたか。	研修後のアンケート 研修中の発言 ワークシートの記述内容
安心安全ナビの内容は、不登校児童生徒の心理面の理解を深めるとともに、チームアセスメントを推進するための共通基盤構築に有効であったか。	研修後のアンケート 研修中の発言
校内研修の内容は、教職員のアセスメントに対する意識や理解が深まり、日常的な指導に生かせるようになることに有効であったか。	研修後のアンケート 研修中の発言 ２か月後の事後アンケート

３　校内研修の実践

「校内研修プログラム」の完成版を適用した、研究協力校での実践事例を以下に示す。

<table>
<tr><th>研修内容</th><th>時間
（分）</th><th>研修の様子他</th></tr>
<tr><td>１　ねらいを確認する。</td><td>２</td><td>不登校児童生徒の内面を含めた理解をもとに支援の仕方を考えましょう。
 </td></tr>
<tr><td>２　不登校の要因について分析する。
・BPSモデルについて知る。
・氷山モデルを用いて、言動から要因を考える。
・そうせざるを得なかった気持ちを考える。
安心・安全ナビ１・２ページ</td><td>15</td><td>生物学的・心理学的・社会的要因と項目を分けて背景を考えると内容が整理され、生徒理解が深まった感じがした。
行動の裏側にどんな要因があるか、子どもがどんな気持ちを抱えているかを考えることが大切だと思った。
 </td></tr>
<tr><td>３　支援目標・具体的支援を考える。
・心のエネルギー曲線について知る。
・エネルギーの回復には、安心安全な環境と理解してくれる存在が必要であることを知る。
・心のエネルギー曲線を基に、どの段階にあり、どのような支援が必要か考える。
安心・安全ナビ４・５ページ</td><td>18</td><td>段階に応じた対応や支援を考える機会になるとともに、様子に応じて支援を変えていくことの気付きになった。
 

テキストに各期の状態や必要な支援の例があり、自分たちで考える際の具体的なヒントになる。
<table>
<tr><th></th><th>体や心の状態</th><th>支援の方向</th></tr>
<tr><td>前兆期</td><td>・朝起きられない
・先生や友達のことを悪く言う
・休み時間に一人でいる時間が増える
・学習を嫌がり、宿題などを提出しなくなる
・しんどいと言って保健室によく行く</td><td>・子どもの気持ちの把握に努める
アセスメントをもとに、登校刺激を与えるか判断する
・保護者と学校の定期的情報交換
・子どもの周りの支援者の把握と連携
・医療機関受診等、身体症状に配慮</td></tr>
</table></td></tr>
<tr><td>４　グループで演習を行う。
・事例をもとに、２・３で学んだ流れでアセスメントをする。
安心・安全ナビ22～33ページ</td><td>20</td><td>自分一人で対応を考えるよりも、学年など周りの先生と共有して一緒に考えてもらうことで、どんな対応をすべきか選択肢が増えることを実感した。

テキストにある様々な根拠や資料に基づいて指導方針が決められると、複数の教員で共通認識できる。</td></tr>
<tr><td>５　研修のまとめを行う。</td><td>５</td><td>一人で抱えてしまう先生も多いので、チームで対応することは先生を守るためにも有効だと感じた。
子どもが不登校になったとき、どのように具体的な支援を考えていくのかという過程が分かりやすく確認できた。
今回のような研修でいろいろな先生に話を聞こうとする雰囲気を作ってくれるとよい。</td></tr>
</table>

Ⅴ　まとめ

１　結果と考察

(1)　テキスト「安心安全ナビ」について

①　テキスト「安心安全ナビ」の改善

研究協力校での実践後、アンケートをもとに、内容を改善した。

表２　テキスト「安心安全ナビ」の改善点

課題点・意見	改善点
校内研修の際、ページがあちこちに行くため、分かりにくい。	校内研修の展開に合わせて、それぞれ見開きで見られるよう構成を見直した。
「心のエネルギー曲線と支援」について、具体例が欲しい。	公認心理士監修のもと、「各期の状態と必要な支援」の表を追加。体や心の状態と支援の方向性を示し、校内研修にも取り入れた。
アセスメントワークの事例について、段階が前兆期や初期に偏っている。	当初、対応に悩みそうな前兆期・初期の事例を中心にしていた。しかし、心のエネルギーが徐々に高まる中期や、足が向き始めたことで教師や保護者がせかしてしまいがちな終期もニーズがあることが分かった。事例を見直し、各期の事例を設定した。
アセスメントワークの事例について、対応例を知りたい。	それぞれの事例に、どの段階にいるか、支援目標と具体的な支援はどんなことが考えられるかを例示した。

②　テキスト「安心安全ナビ」の成果と課題

テキスト「安心安全ナビ」を研修などで活用した結果、以下の有用性が明らかになった。

表３　テキストによる共通理解に関わるアンケート調査の記述

- そもそも不登校とはどういう状態であるか、学校全体で共通理解があることで、対応への一貫性が出てくる。
- 「三つの要因で考える」ということ、初めて知った。
- 生物学的・心理学的・社会的要因と項目を分けて背景を考えると内容が整理され、児童生徒理解が深まった感じがした。
- 行動のエネルギーと心のエネルギーの図など、心理的な動きを視覚的に理解できた。
- チーム学校として対応していくために、共通のテキストがあることは、児童生徒へのアプローチとしてとても効果的である。

テキスト「安心安全ナビ」でＢＰＳモデルや氷山モデルを示したことが児童生徒理解の内面まで理解を深めることに有効であったことがわかる。また、共通の知識をもとにアセスメントを行い、児童生徒理解を深めていこうとする姿勢が見られた。

表４　支援に関わるアンケート調査の記述

- エネルギー曲線各期の状態や必要な支援の例があることで、今どの段階かを見極めて適切に対応できる見通しがもてた。
- 一人で抱えてしまう先生も多いので、こうした指針があるとチームで対応する安心感に繋がる。

テキスト「安心安全ナビ」で心のエネルギー曲線と段階別の支援例をセットで提示したことにより、教職員が児童生徒はどのような状態であるか捉え、見通しをもって次のアプローチを考えられるようになったことがうかがえる。

このように、現場のニーズを取り入れて改善を進めたテキスト「安心安全ナビ」は、不登校児

童生徒の心理面の理解を深め、共通基盤を作ることに有効であったと考える。

研修での有効性は確認されたが、今後は日常業務の多忙さの中で、いかにして本テキストを継続して活用するかが課題である。教職員のニーズを取り入れ内容の充実・改善を図っていく必要がある。また、アセスメントワークについても、様々な事例を増やしていくなど、より実用性を高める改善を継続していく必要がある。

(2)　「校内研修プログラム」について

①　「校内研修プログラム」の改善

全４回の実践後のアンケートをもとに、主に表５の四つの観点で内容を改善した。

表５　「校内研修プログラム」の改善点

改善の視点	意見	改善点
事例の設定	・事例がイメージしにくい。 ・情報が断片的である。	当初、事例が「ゲームに熱中し引きこもっている生徒」というやや極端な設定で、提示される情報は断片的であった。どの学校にもいそうな「スマホの利用時間が長い」事例に変更。さらに、職員が捉えた情報として、授業中の様子・提出物・休み時間の過ごし方など、日常的に観察できる視点を整理して提示するように改善した。
アセスメント手法	・氷山で背景を考える際、何を書くか分からなかった。	生物学的・心理学的・社会的の三つの枠組みにわけ、睡眠・食事・運動など具体例を提示しておき、チェックを入れるように改善した。
支援方針	・具体的な支援を考える時間が短い。 ・段階別の支援方針が欲しい。	エネルギー曲線をもとに「今どの段階にあるか」を推定した上で、「体や心の状態と支援の方向性」の表をもとに短期目標と具体的な手立てを考えるワークを導入した。
チーム支援の強調	・「チーム対応が大切」という一般論の提示に留まっている。	「熱心な先生ほど抱え込む」「責任と心理的負荷の分散」というスライドを追加。教職員が一人で悩まず、組織で対応することが「子供のため」だけでなく「自分たちを守るため」でもあるというメッセージを強化した。

②　「校内研修プログラム」の成果と課題

「校内研修プログラム」の有効性について、研究協力校へのアンケート調査の結果を基に述べる。

まず、「アセスメントの仕方について理解できたか」という質問項目に、83％がよく理解できたと答えた。記述では、「思い込みで指導するのではなく、事実の裏側にある原因を考え、話合いをしながら解決していきたい」「行動の裏側にある要因や子供がどんな気持ちを抱えているか考えることが大切だ」「限られた情報の中でわかったつもりになってしまわないように、子供との関わりの中で多面的に情報を集めていくことが大切と感じた」など客観的なアセスメントの重要性を指摘する声が多く見られた。これらのことから、情報を集め、児童生徒の内面まで理解して対応しようとする様子がうかがえた。

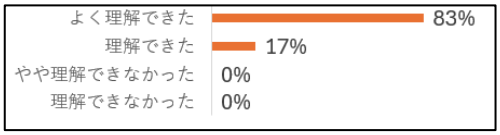


図４　アセスメントの仕方について理解できたか

次に、「学校全体での情報共有・共通理解の必要性について理解できたか」という質問項目に、89％がよく理解できたと答えた。「テキストにある様々な根拠や資料に基づいて指導方針が決められると、複数の教員で共通認識できる」「ベースとなる考え

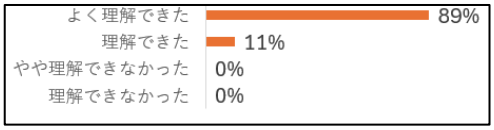


図５　学校全体での情報共有・共通理解の必要性について理解できたか

方や指針があると、チームとしての対応がぶれにくい」など、共通理解の必要性を指摘した声が多くあり、「学校全体で共通理解を図れていないというのは恐ろしいことである」と危機感をもった感想もあった。また、「できるだけ多くの情報を集めるとともに、多くの先生方の見方（意見）を大切にする」「自分の意見が、あくまで自分の視点から見た意見でしかないことが分かった」など情報共有やチーム支援と連携の大切さを実感する声もあった。さらに、「自分一人で対応を考えるよりも、学年など周りの先生と共有して一緒に考えてもらうことで、どんな対応をすべきか選択肢が増えることを実感した」「一人で抱えてしまう先生も多いので、先生を守るために有効であり、一人で解決しようとしないことの大切さが分かった」といった意見からは、チーム支援を行うことで児童生徒にとって有効な支援を行えるだけでなく、抱え込みを防いだり職員の心理的負担を分散させたりするなどの効果を実感する声もあった。これらのことから、教員集団で情報を集め、アセスメントを行うことで児童生徒の内面をより深く理解して、チームで支援しようとする様子がうかがえた。

研修の２か月後に事後アンケートを行った。「校内研修で学んだアセスメントについて、日常の指導で意識するようになったか」という質問項目で、意識するようになったとの回答が24％、肯定的な回答は100％に達した。このことから、研修の実施から２か月が経過した時点においても、アセスメントの視点を意識して日常の指導にあたっており、研修効果が一時的なものに留まらず継続している様子が見られる。また、クラス担任をしている教職員への「気になる児童生徒について、職員間で相談する機会が増えたか」という質問項目で、当てはまるとの回答が13％、肯定的な回答は100％に達した。このことから、抱え込まずに相談して対応しようとする様子が見られた。

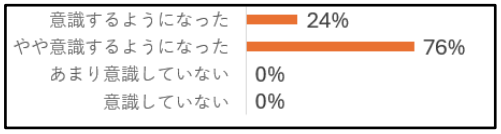


図６　校内研修で学んだアセスメントについて、日常の指導で意識するようになったか

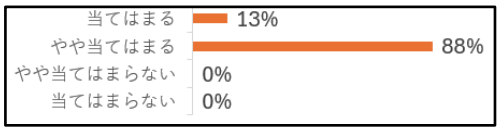


図７　気になる児童生徒について、職員間で相談する機会が増えたか

このように、校内研修内容は、教職員のアセスメントに対する意識や理解が深まり、日常的な指導に生かせるようになることに有効であったと考える。

校内研修については、年間計画の年度当初に位置付け、新任者や異動者とも共通理解を深めるとともに、相談し合える空気をつくっていく必要がある。また、研修実施後の期間経過に伴い、意識の定着度には個人差が生じる傾向にあるため、ミニ研修や学年会での共有など機会を定期的に設定し、組織での取り組みを維持・向上させていく仕組を作ることが大切であると考える。

２　提言

不登校をはじめとする生徒指導・教育相談の諸課題に対しては、共通の知識や考え方を基盤とし、チームでのアセスメントを基に、組織として同一歩調で取り組んでいくことが大切である。教職員全体がアセスメントの視点をもち、チームで対応する文化をつくることで、児童性への安心安全な支援につなげていけると考える。

＜参考文献＞

・文部科学省（2022）　「生徒指導提要」
・奈良教育大学（2019）　「不登校の理解と対応ガイドブック＝保護者編＝第２版」
・高山恵子・花丘ちぐさ・浅井咲子・濱田純子（2023）　「こころの安全・安心をはぐくむ不登校支援子どもの心をいやすポリヴェーガル理論に基づく」　学事出版

〈指導担当〉
山田　雅之